



独立行政法人 国立病院機構

## 四国こどもとおとなの 医療センター

### アートプロジェクト Topics

— 今月のショット —

ニッチの中の贈り物 (ドンダリのトロロ)

院内の19カ所に小さな扉のついたニッチ(飾り棚)があります。その中には時々、患者さんや、ボランティアさん、職員さんからのメッセージやギフトが入っています。見つけた方は自由にお持ち帰りいただけます。まずは開いてみてくださいね。



2013年11月(創刊号)

### — 院内の小さな声から —

「あのフクロウはどうになりました？」何の事なのかよくわからないでいる私に先生は「女の子が『こわい。』って言うてたみたいけど・・・」と、少し心配そうに小聲で話されました。そういえば数日前、「患者さんが部屋に飾られているフクロウの絵を怖がっている。」と病棟から連絡があり、絵を掛け替えたのでした。「あの絵はしばらくボランティア室で休憩しています。また、次の希望者があらわれるまで。」と伝えると先生は安心したように「また、どこかに飾られるのですね。よかった。僕は個人的にフクロウが好きなので。」と言ってにっこりされました。院内にある300点の絵画は患者さんの好みやその日の気分によって交換可能です。絵に正解や間違いはなく、見る人の心に寄り添える絵が「いい絵」なのだと思います。



## 当院のアートについて

当院ではホスピタルアートを取り入れています。「アート」と一言言ってもその捉え方は様々で美術館で展示されるような作品から、子ども達の作る作品まで、その側面は多岐にわたり、解釈も人それぞれでなかなか説明するのが難しいものです。でも、当院のホスピタルアートはとてもシンプル。院内に施されたすべての作品は「患者さんの快復を祈る職員の想いの結晶」なのです。ホスピタルアートは見えないものを目に見えるようにする魔法。届ける人がいて、受け取る人がいる。どこか遠い場所から立派な「作品」を持ち込むのではなく、その場所に充満している、まだ表現されていない人の「想い」を、形にするのが当院のホスピタルアートの役目なのです。ですから当院に設置された作品には壁画から造形物、すべてに「物語」があります。その物語について月に一度、少しずつお伝えしてゆきたいと思います。医師は四六時中患者さんにとってベストな治療法を考えています。看護師は、いつも一番近くで患者さんに寄り添い、快復を祈っています。一見治療とは関係のなさそうに見えるスタッフもすべて、患者さんの幸せを祈りつつ日々働いているのです。だけど、なかなかそのことを伝えるのは難しい。その気持ちを届けるお手伝いをするのがホスピタルアート。人と人の想いを循環させる技術。「誰かが誰かの幸せを願う場所。」病院とは本来そんな場所なのです。

### 今月の一枚

作家:ミロコマチコ

生き物がくつろぐ様子を見ると、ここは安全な場所なんだ、と人は認識し安心するそうです。だから人はペットを飼うそうです。私の絵がこどもたちにとってそんな存在になれば、と思い描きました。